**「李白の生涯」　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　山居　閑人**

　李白は、杜甫と並んで詩界の双璧とされ、変幻自在な詩風から「詩仙」と呼ばれています。西域で裕福な商人の子として生まれ５歳の時にに移住したとされています。一説には異民族の血が混じっていたと言われ「」がありますが、真偽の程は分かっていません。

　幼い頃からその秀才振りを認められ、読書に励むとともに、剣術を好み、の徒と交際し、かつ、隠者と交際したり、道士としての修行をしたりしたと言われています。

　早くも詩才を発揮し、この時代、１８歳の時に作られた詩として、**「載天山の道士を訪ねて遇わず」**があります。華麗な山に済む道士を尋ねていったが、外出中で会えなかった残念さを歌った物で、このようなテーマの詩は、の「隠者を尋ねて遇わず」の他、多数造られるようになりました。

**犬吠水聲中　　　犬はゆ の**

**桃花帶雨濃　　　は露を帯びてやかなり**

**樹深時見鹿　　　は深くして 時に鹿を**

**溪午不聞鐘　　　はにして 鐘を聞かず**

**野竹分青靄　　　はを分け**

**飛泉掛碧峰　　　はにかる**

**無人知所去　　　人のく所を知る無し**

**愁倚兩三松**　**えてる**

　李白は、２５歳のとき、単身で蜀の地を離れ、諸国漫遊の旅に出ました。このとき、作られたのが**「の」**です。月を恋人又は親友に例え、蜀の地との別れを詠っていますが、前途への不安も感じられます。李白は、二度と故郷に帰ることはありませんでした。

**峨眉山月半輪秋　　　 の秋**

**影入平羌江水流　　　影はに入って流る**

**夜發清溪向三峽　　　夜 を発してに向う**

**思君不見下渝州**　　　**君を思えども見えず に下る**

長江の急流で知られる三峡を過ぎると、湖北省に入り、その入り口に山があり、ここから楚の平野地帯に入ります。李白は、ここを通り過ぎるとき、**「を下りて送別す」**という詩を作りました。狭い山峡を通り抜け、広々とした台地にやってきた開放感と前途への期待があふれています。この場合、「送別」とは、李白自身が故郷の友人に別れてきたことを示すものです。この詩を紹介いたします。

**渡遠荊門外　　　渡ること遠しの**

**来従楚國遊　　　来りて従うの**

**山随平野尽　　　山は平野にって尽き**

**江入大荒流　　　江はに入りて流る**

**月下飛天鏡　　　月 りて飛び**

**雲生結海楼　　　雲生じてを結ぶ**

**仍憐故郷水　　　お憐れむ故郷の水の**

**万里送行舟**　　 **を送るを**

李白は、ここを通り過ぎるとき、**「秋 荊門を下る」**という詩を作りました。曾てが江南の肴のを食べるために官職を捨てて故郷に帰った故事を引き合いに出し、自分は、風流心で山を愛するためにこの地にやってきたと、まだ見ぬ地への期待を表しています。

**霜落荊門江樹空　　　霜はに落ちてし**

**佈帆無恙掛鞦風　　　無くにく**

**此行不為鱸魚鲙　　　の のの為ならず**

**自愛名山入剡中　　　ら名山を愛してに入る**

　江南地方を漫遊していた李白は、２８歳の時、と知り合いました。孟浩然は、既にの、などの知遇を受け、詩人としての名声は高く、その清廉潔白な人柄は人々の尊敬を集めていましたが、官職に恵まれず流浪の身でした。李白は、孟浩然を尊敬する「孟浩然に送る」という詩を孟浩然に送り、尊敬の念を表しています。二人は、共に長江を遡って、翌年、に達し、李白は、そこで、歓楽街として栄えていたに行く孟浩然と別れました。この時作られたのが有名な**「にてのにくを送る」**です。孟浩然がこのとき揚州に向かったのも職探しのためであったと言われています。

　孟浩然を乗せた船の姿が段々と小さくなり、ついに地平線の彼方に消えてしまうまで見送っている李白のなごりおしさを示し、寂しさを、唯残る長江の流れを示すことにより表した名作です。

**故人西辭黄鶴樓　　　西の を辞し**

**煙花三月下揚州　　　 に下る**

**孤帆遠影碧空盡　　　の に尽き**

**惟見長江天際流**　　**だ見る長江のに流るるを**

　この後、李白が孟浩然と会ったと言う記録はありませんが、盛唐の時代の詩人の多くは交流を結んでおり、詩の交換はあったと思われます。後年、李白は**「に贈る」**と言う詩を作り、その清廉、風流で世俗を超えた生き方に敬意を表しております。

**吾愛孟夫子　　　吾は愛す**

**風流天下聞　　　風流 天下に聞こゆ**

**紅顏棄軒冕　　　　をて**

**白首臥松雲　　　 にす**

**醉月頻中聖　　　月にうてりににり**

**迷花不事君　　　花に迷いて君に事えず**

**高山安可仰　　　 んぞ仰ぐけんや**

**徒此揖清芬**　　　**らにににす**

　その後、李白は官職を求めて各地を訪れたり、隠者や道士と交流したりしました。この時作られたのが、「」「山中にてとす」です。

　**「山中問答」**は、わざと絶句の法則を無視して古詩にみせかけ、隠者としての生活振りを強調したもので、絶句でなく古詩に分類する学者もいます。又、「笑って答えず」「」などの語には、詩人として名高いの影響がみられます。

**問余何意棲碧山　　　余に問う 何の意あってにむと**

**笑而不答心自閑　　　笑うて答えず 心 からなり**

**桃花流水杳然去　　　 として去る**

**別有天地非人閒**　　　**別に天地のにざる有り**

　**「にてとす」**も、「山中問答」と同じように、古詩に見せかけた詩であり、その転句は、にみられるの言葉を引用しています。琴も陶潜が愛した楽器であり、これらにより、隠逸生活を巧みに表現しています。

**兩人對酌山花開　　　すれば開く**

**一杯一杯復一杯　　　一杯一杯また一杯**

**我醉欲眠卿且去　　　我酔うて眠らんと欲す く去れ**

**明朝有意抱琴來　　　 意あらば琴を抱いて来たれ**

漂泊の旅を続ける李白は、のあるの近くで、有力者から招かれて船遊びをし、その時の様子と感慨を**「」**という詩に詠いました。この詩は，豪快な物であり、の詩と，屈原の主であったの楼閣を引き合いに出し，詩は永遠であるが、王朝の栄えなど一時的なものであると、自分が詩作に生きることを誇る物です。

**木蘭之枻沙棠舟　　　の の舟**

**玉簫金管坐兩頭　　　 に坐す**

**美酒樽中置千斛　　　美酒 を 置き**

**載妓隨波任去留　　　を せ 波にいて にす**

**仙人有待乘黄鶴　　　仙人 待つ有りて に乗じ**

**海客無心隨白鴎　　　 心 無く　にう**

**屈平詞賦懸日月　　　のはを け**

**楚王臺樹空山丘　　　のはしく**

**興酣落筆搖五嶽　　　 にして 筆を落とせば をかし**

**詩成笑傲凌滄洲　　　詩 成りて すれば を ぐ**

**功名富貴若長在　　　功名 しえに在らば**

**漢水亦應西北流**　　**もたに西北に流るべし**

自由気ままに旅を続けたり隠者や道士と交流したりしていた李白ですが、故郷を離れてから５、６年が経つと、望郷の念を懐くこともあったようです。**「」**はこのころ作られました。ふとしたことがきっかけとなった作者の自然な動きにより、望郷の念が深いことを示した名作です。

**牀前看月光　　　 月光を看る**

**疑是地上霜　　　疑うらくはれ地上の霜かと**

**擧頭望山月　　　をげてを望み**

**低頭思故郷**　　　**をれて故郷を思う**

「」の月光を月に例えることは、日本において和歌にも影響を与えております。これらのうち、の**「ひとりぬる」**、の**「あふぎみる」**、の**「あさぼらけ」**が代表的なものです。

**ひとりぬる山鳥の尾のしだり尾に霜おきまよふ床の月かげ（藤原定家）**

**あふぎみる高嶺の月にふる郷の草葉の霜の色をしぞ思ふ（松平定信）**

**朝ぼらけ有明の月とみるまでに吉野の里にふれる白雪（坂上是則）**

蜀を離れてから約十年後、李白は、同じく望郷の念を詠った**「の」**を作りました。辺境の地で秋が急激に深まるのを延べ、それにつれて深まる望郷の念が深まることを表しています。

**歳落衆芳歇　　　落ちてみ**

**時當大火流　　　時はの流るるに当たる**

**霜威出塞早　　　 をでて早く**

**雲色渡河秋　　　河を渡って秋なり**

**夢繞邊城月　　　夢はる の月**

**心飛故國樓　　　心は飛ぶの楼**

**思歸若汾水　　　帰らんと思えばのく**

**無日不悠悠**　　**日としてたらざるは無し**

放浪の旅を続けるとき、慰めてくれるのは、酒です。李白は大の酒好きで、杜甫の「」にも「」と歌われております。旅の途中で酒屋に立ち寄り、その主人に受けたもてなしに感謝した詩が**「」**です。

　玉でできた杯に一杯に継がれた美酒を飲むうちに、自分が異郷にいることなど忘れてしまうことを詠っています。もちろん、酒代は、この詩一首で只になったでしょう。

蘭陵美酒鬱金香　　　**の美酒**

玉碗盛來琥珀光　　　**盛り来たる　の光**

但使主人能醉客　　　 **主人をして くをして酔わしめば**

不知何處是他鄕　　　**知らずれのか是れ**

から洛陽に戻った李白は、ここでも、望郷の詩である**「にをく」**を作りました。春風に乗って城中に吹き渡る曲は、別れを示す「」。これによって、人々は望郷の念を起こさざるを得ないのです。

**誰家玉笛暗飛聲　　　が家のぞ に声を飛ばす**

**散入春風滿洛城　　　散じてに入りて に満つ**

**此夜曲中聞折柳　　　の夜 曲中 を聞く**

**何人不起故園情**　　**かのを起こさざらん**

　漂泊の旅を続けた李白は、４２歳の時、当時の宮廷詩人として有名だったを訪れてその詩才を認められ、地上に流罪となった仙人の意味を持つ「」と呼ばれました。そして、賀知章等の推挙により、宮廷詩人としてに仕えることになりました。このとき、妻との別れに際し、**「に別れにく」**という三首の詩を作りました。「其の一」では宮廷に入ることの喜びを示すと共に、「長安は遠くて見えないから、自分のことを思うなら、夫を思う妻が上ったら石になったという「」に上らなければならないね。」とからかっています。

**王命三徵去未還　　　 たびす 去らばだらざらん**

**明朝離別出吳關　　　　離別してをず**

**白玉高樓看不見　　　 看れども見えず**

**相思須上望夫山**　　 **らくるべし**

　一方「其の二」では、李白は妻に対し、出世出来なくて返って来たに対して妻が機織り機からおりなかった例を引きながら、自分は黄金の印を帯びるような高い身分になって帰ってくるから、そんな思いはしないで済むと、自信溢れる態度を示しています。

**出門妻子強牽衣　　　門を出ずれば妻子強いてをき**

**問我西行幾日歸　　　我に問う にか帰ると**

**歸時儻佩黃金印　　　来たる時 し黃金の印をぶれば**

**莫見蘇秦不下機**　　 **よりらざるをらん**

李白が作った詩の中に**「」**という四首の詩があります。これらの詩がいつ作られたのかは明らかではありませんが、春、夏、秋、冬を表したもので、このうち、秋を表した其の三が最も有名で、「子夜呉歌」と言えばこれを指します。長安の天空にポツリとかる月、秋風、の音を組み合わせて寂しさを強め、戦場にいる夫の帰りを待つ心の深さを表しています。

**長安一片月　　　長安 の月**

**萬戸擣衣聲　　　を打つの声**

**秋風吹不盡　　　 吹いて尽きず**

**總是玉關情　　　てれ の**

**何日平胡虜　　　何れの日か をらげて**

**良人罷遠征**　　 **遠征をめん**

「子夜呉歌」は、日本の和歌にも影響を与えました。その代表的なものが、参議雅経が詠んだ**「み吉野の」**です。この歌は百人一首にも採られています。

**み吉野の山の秋風さ夜ふけてふるさと寒く衣うつなり**

　宮廷詩人として、李白はいろいろな詩を作りましたが、その一方で、夫と別れて暮らす妻や，皇帝からがお召しのない後宮の女の悲しみを詠った**「」**を作っております。これらを三首紹介いたします。

　最初に「」を紹介します。立派な身なりをして出征した夫を思って眠れないでいると、月や花びらまでがその悲しみを笑っているように見えると詠っています。

**白馬金羈潦海東　　　 の東**

**羅帳繡被臥春風　　　 にす**

**落月低軒窺燭盡　　　 軒にれて の尽くるをい**

**飛花入戸笑床空**　　 **にって を笑う**

続きまして**「」**を紹介いたします。離れた場所に流罪となった夫のために、「」を織り込んだ錦を作り夫への思いを表したというの女、蘇蕙の故事を引きながら、烏の声の中でを織りながら、夫と別れて暮らす妻の悲しみを巧みに詠っています。

**黄雲城邊烏欲棲　　　 まんと欲し**

**歸飛唖唖枝上啼　　　帰り飛びとしてにく**

**機中織錦秦川女　　　 錦を織るの**

**碧紗如煙隔窗語　　　 煙の如く 窓を隔てて語る**

**停梭悵然憶遠人　　　を停め としてを憶う**

**獨宿孤房涙如雨　　　独りにして 涙雨の涙し**

　次に、**「怨情」**を紹介致します。皇帝の寵愛を失い、一人寂しく夜を過ごす後宮の心を表した詩です。今、皇帝の寵愛を受けている宮女への嫉妬が表されています。

**美人巻珠簾　　　美人 を巻き**

**深坐嚬蛾眉　　　深く坐して をむ**

**但見涙痕濕　　　だ見るのえるを**

**不知心恨誰**　　**知らず心にをか恨む**

**この頃のことであろうと思われますが、李白は、**悲劇の美女「」を題材にした詩を作っております。王昭君は漢の後宮にあった絶世の美女でしたが、**時**の皇帝は高級の女達の絵を描かせ、それを見てお召しになる者を決めていました。そのため、後宮の女は絵師に賄賂を送って自分の姿を美しく書かせましたが、王昭君は賄賂を送らなかったので、絵師はその姿を醜く書きました。当時は友好国であったの王であるが漢を訪れ、後宮の女の一人を自分の妻として迎えたいと申し出ました。

時の皇帝は、醜い女を与えようとして王昭君を指名しました。単于に引き合わせるときに、皇帝は王昭君が絶世の美女であることに気付きましたが、既に遅く、王昭君は単于の妻として匈奴の地に送られそこで生涯を終えました。

この話は広く伝えられ、を始め多くの詩人が、王昭君を詠った詩を作っております。李白は、漢の都から辺境の地である匈奴の地に行かなければならない王昭君の哀れさを**「」**に詠いました。

**昭君拂玉鞍　　　 を払い**

**上馬啼紅頰　　　馬に上ってに泣く**

**今日漢宮人　　　 の人**

**明朝胡地妾**　　　 **の**

**宮**廷詩人として仕える李白に、思いがけない幸運がやってきました。当時、牡丹が珍重されるようになり、がという香木で造ったの庭に四色の牡丹を植え､当時、と呼ばれていたを側に置いて宴会を開きました。そこで、玄宗は「このような楽しい宴において、どうして古い曲を演奏することができるか。新しい曲を聞いて楽しもう。」と言いだし、直ぐに李白が詩を作るために呼び出されました。そのとき李白は泥酔状態で靴も脱げないような状態でしたが、水をかけて目を覚まさせ、筆を握らせると、忽ちのうちに、楊貴妃の美しさを牡丹に例えた「三首」を作りました。

　玄宗は直ちに楽士に曲をつけさせ、名歌手に歌わせ、自らも笛で伴奏ました。楊貴妃は、の杯で西域産の葡萄酒を飲みながら、歌の意味を悟って微笑んだと言われています。

李白にとって、一番華やかしい時でした。「**清平調詞」**のうち、一番有名な其の一を紹介いたします。この詩は、楊貴妃の美貌を牡丹の花にたとえると共に、これほどの美人に匹敵する者は，仙人の住むか、のの作った美女の住まうであるで月明かりの下でしか見ることが出来ないであろうと、その美貌ぶりを詠っています。

**雲想衣裳花想容　　　雲には衣装を想い 花にはを想う**

**春風拂檻露華濃　　　 をって やかなり**

**若非羣玉山頭見　　　しに見るにんば**

**會向瑤臺月下逢**　**ず にかってわん**

続きまして、**「清平調詞其の二」**を紹介致します。この詩は、のはの神女と夢に契った情交がむなしくなって悲嘆したと言う故事を引き、もし、楊貴妃を漢の美女に比べるとすれば、有名なくらいしかいないだろうと詠っています。

**一枝紅艶露凝香　　　の をらす**

**雲雨巫山枉斷腸　　　 げて**

**借問漢宮誰得似　　　す か似るを得ん**

**可憐飛燕倚新粧　　　の にる**

続きまして、**「清平調詞其の三」**を紹介いたします。この詩は、咲き誇る牡丹と楊貴妃の美しさが世の春をほぎ、玄宗がそれを微笑みながら見つめている情景を詠っています。

**名花経國兩相歡　　　 つながらぶ**

**長得君王帯笑看　　　常にの笑いを帯びて看るを得たり**

**解釋春風無限恨　　　解釈す無限の恨み**

**沈香亭北倚闌干　　　 にる**

牡丹は、則天武后の時代から尊重され始めましたが、それを愛する習慣が現在まで続き、中国の国歌になっているのも、清平調詞の影響としている説もあります。其の一は特に有名です。

　ところが、李白にとって思いがけないことが起こりました。このとき、玄宗の命により李白の靴を脱がさせられたのが、玄宗第一のお気に入りのでした。宦官と言っても、の肩書きを持ち、宮廷詩人としてという役職を与えられているものの実質的に位を持たない李白とは比べものになりません。高力士は、このことを屈辱とし、「清平調詞其の二」において、下層階級の出身であった漢の美女、を楊貴妃に例えたことを問題にし、楊貴妃を下層階級の出身者に例えたと、玄宗にしました。又、杜甫の「」にあるように、酒に酔って玄宗の呼び出しに応じないように勤務態度が悪かったことも問題とされ、宮廷から追放されてしまうことになりました。

　このとき、李白は、その失意を**「初めてを出でてを尋ねて遇わず、のを詠ず」**という詩に表し、故郷のに隠棲しようという意思を示しました。この詩を紹介したします

**落羽辭金殿　　　羽を落としてを辞し**

**孤鳴託繡衣　　　してにす**

**能言終見棄　　　く言うもに棄てられ**

**還向隴山飛**　　**ってに向かって飛ぶ**

宮廷を追放された李白は洛陽に向かいましたが、ここで奇跡が起こりました。杜甫と遭遇したのです。後代の人はこの出会いを「太陽と月が出会ったようなものだ。」と呼んでいます。また、辺塞詩人として名高いとも出会い、三人は約半年、李白と杜甫は１年半に亘って旅をしました。李白と杜甫は、というところで別れましたが、別れに際し、李白は「の東 にてを送る」という詩を杜甫に送りました。石門での別れの後、「重ねての開く」ことはなく、二人は二度と会うことはありませんでした。杜甫は李白を尊敬すること篤く、１４首の詩を寄せておりますが、李白は、杜甫に対して４首の詩しか寄せておりません。二人の詩には、お互いの影響は殆ど見られません。お互いに認め合いながら、詩風には相容れないものがあったのでしょう。

**「の東 にてを送る」**を紹介致します。

**醉別復幾日　　　 たぞ**

**登臨復池臺　　　 にし**

**何言石門路　　　何ぞ言わんの**

**重有金樽開　　　重ねての開く有らんと**

**秋波落泗水　　　 に落ち**

**海色明徂徠　　　 に明らかなり**

**飛蓬各自遠　　　 遠し**

**且盡手中杯　　　くのを尽くさん**

杜甫と別れた後、李白は江東の地を漫遊しました。この頃の詩名は高く、もはや、実家からの仕送りがなくても、旅費に事欠くことはなかったと思われます。李白は、宮廷詩人の頃、と親好があったと思われ、この頃、阿倍仲麻呂が帰国の途中で船が難破して死んだという報に接し、「をす」という詩を作っております。この詩は、西安の興慶宮公園にある阿倍仲麻呂記念碑に刻まれております。**「をす」**を紹介致します。

**日本晁卿辞帝都　　　日本の 帝都を辞し**

**一片繞蓬壷　　　 をる**

**明月不帰沈碧海　　　明月 帰らず に沈み**

**白雲愁色満蒼梧　　　 に満つ**

**こ**のころ、李白は，辺塞詩人として有名なが蜀のの近くに流罪となったことを聞きました。李白と王昌齢との関係は良く分かっておりませんが、は病気療養中に王昌齢が尋ねてきたので無理をして歓待し，それが元でなくなったと言われており、｢旅亭画壁｣の故事にみられるように、王昌齢、、は飲み友達でした。このような盛唐の大詩人達の交友関係を見ると、王昌齢とも長安滞在中に交際があったと考えられます。この詩**「がに左遷せらるるを聞き遙かにの有り」**を紹介いたします。

**楊花落盡子規啼　　　 落ち尽くして　く**

**聞道龍標過五溪　　　く を過ぐと**

**我寄愁心與明月　　　我　を寄せて　明月にう**

**隨風直到夜郎西　　　風に隨いて 直ちに到れ の西**

李白は、当時、と呼ばれていたを訪れ、そこで、に登り、「のに登る」という詩を作りました。この詩は、の「」を意識した詩です。『苕溪漁隱叢話』には、李白が黄鶴楼に上って黄鶴楼の詩を作ろうとしたところ、催顥の詩が壁面に書かれており、「これ以上の詩は作れない。」と言って詩を作るのを諦めたということが記されております。

　この詩は、「黄鶴楼」と構成がほぼ同一であり、韻目が同一、、は韻字まで同一であるなど、似たところがあります。李白が黄鶴楼で受けた「の」をこの詩でごうとしていたことがわかります。この詩において「長安」は、、「」は、をして玄宗皇帝から遠ざけたを意味していると考えられます。**「のに登る」**を紹介いたします。

**鳳凰臺上鳳凰遊　　　 遊び　去り**

**鳳去臺空江自流　　　台しくして ら流る**

**呉宮花草埋幽徑　　　のは にもれ**

**晉代衣冠成古丘　　　の衣冠はと成る**

**三山半落靑天外　　　 ば落つ の**

**二水中分白鷺洲　　　 す**

**總爲浮雲能蔽日　　　てのく日をうが為に**

**長安不見使人愁**　　**長安見えず 人をしてえむ**

　李白は、呉と越の地を訪れ、曾てののとのの戦いを懐古しながら、双方の栄華を誇った宮殿が跡形も無くなっていることを「」「」の詩に表しました。諸行無常、盛者必衰を示す詩です。「蘇台覧古」と」「越中懐古」を紹介いたします。

始めに**「蘇台覧古」**を紹介いたします。かつて、夫差が、勾践が送った絶世・頃國の美女であると享楽したとされるの宮殿は野原となり、宮殿において西施を照らしていた月だけは、変わりなく、この地を照らしていると詠うことにより、呉の繁栄が無常のものであったことを表しています。「の人」とは西施をさしています。

舊苑荒臺楊柳新　　　 **たなり**

菱歌淸唱不勝春　　　 **春にえず**

只今惟有西江月　　　**只今 惟だ　の月のみありて**

曾照呉王宮裏人　　　**曾て照らす の人**

続きまして、**「越中懐古」**を紹介いたします。呉を破って返って来た越は繁栄を誇ったが、今では、その宮殿も跡形もなくなり、ただ、の飛ぶのが見えるだけだと詠うにより、同じく、越の繁栄も無常のものであったことを表しています。

**越王勾踐破呉歸　　　 呉を破って帰る**

**義士還家盡錦衣　　　義士 に還って 尽くす**

**宮女如花滿春殿　　　宮女 花の如く に満つ**

**只今惟有鷓鴣飛**　　**只今 だの飛ぶ有るのみ**

その後、５０歳を超えた李白は、南京の南になる風光明媚な地であるを訪れました。ここで、李白は十七首の連作である「の」を作りました。もはや老境に差し掛かったせいか、いずれも望郷の念や淋しさを感じさせるものであり、楽天家の李白にしては独特なものです。このうち、「」で始まる其の十五は特に有名で、単に「秋浦の歌」と言えば、これを指します。**「秋浦の歌」**を紹介いたします。

**白髮三千丈**

**縁愁似箇長　　　愁いにってくの如く長し**

**不知明鏡裏　　　知らずの**

**何處得秋霜　　　れの処にかを得たる**

　｢秋浦の歌｣は、によって二首の短歌に訳されております。これらを紹介いたします。

**我が愁い白髪三千丈なるほどにこれほど伸びてなおも尽きざる**

**この髪を鏡に映しみるときはうつろい早き寂しさぞ知る**

このころ、李白は、南京を中心とした地方を漫遊しましたが、旅の途中で、という人の家に滞在し、もてなしを受けました。別れに際し、船に乗ると、岸から王倫一族が足を踏みならして歌う歌が聞こえてきました。李白は、早速**「に」**という詩を作り、王倫に渡しました。王倫は李白直筆のこの詩を、家宝としたと言われています。この詩を紹介いたします。

**李白乘舟將欲行　　　李白舟に乗りてに行かんと欲す**

**忽聞岸上踏歌聲　　　ち聞く の声**

**桃花潭水深千尺　　　 深さ**

**不及汪倫送我情　　　及ばす が我を送るのに**

李白は、風光明媚な地であるを訪れ、船の中からを眺めた**「天門山を望む」**という詩を作りました。雄大な景色を詠ったスケールの大きな詩です。この詩を紹介致します。

**天門中斷楚江開　　　 中断して 開き**

**碧水東流至北廻　　　 東に流れて 北に至ってる**

**兩岸靑山相對出　　　両岸の してで**

**孤帆一片日邊來　　　 よりる**

同じ頃、李白はの北にあるを訪れ、**「独り敬亭山に座す」**という詩を作りました。山に向かって楽しみ、自然と一体になった気分を表す詩であり、後世「事無く、眼中人無し」と評されました。この詩を紹介致します。

**衆鳥高飛盡　　　 高く飛びて尽き**

**孤雲獨去閑　　　　り去りてなり**

**相看兩不厭　　　て つながらわざるは**

**只有敬亭山**　　　**だあるのみ**

このころ、李白は**「のにてをす」**という詩を作りました。この世はとにかくままならない。世を捨てて隠棲生活を送りたいという願いが込められた、味わい深い詩です。この詩を紹介いたします。

**棄我去者　　　　　　我をて去る者は**

**昨日之日不可留　　　の日にして むからず，**

**亂我心者　　　　　　我が心を乱す者は**

**今日之日多煩憂　　　の日にして 多し**

**長風萬里送秋雁　　　 を送る**

**對此可以酣高樓　　　れに対し て 高楼にすし**

**蓬莱文章建安骨　　　の文章 の骨**

**中間小謝又清發　　　の 又た**

**倶懷逸興壯思飛　　　に　を　きて 飛び**

**欲上青天覽明月　　　青天にりて　明月をんと欲す**

**抽刀斷水水更流　　　刀をきて水をてば 水 更に流れ**

**舉杯銷愁愁更愁　　　を挙げて愁いを　せば い 更にう**

**人生在世不稱意　　　人生 世に在りて 意にわざれば**

**明朝散髮弄扁舟**　　　 **を散じて をせん**

　李白は、ので乱れた地域を避ける意味もあって、さらに長江を遡り、の南のの麓の地に隠棲しました。ここは、かつてが生活を送った地に近い土地です。このとき作られたのが**｢のを望む｣**です。廬山のひとつの峯が清少納言の故事で名高いです。香炉峰を「」と表現することにより、｢｣が香炉から立ち上る煙と、滝に依って生じる紫色の水煙を示すことになり、かつ、転句、結句によって、滝のスケールの大きさを表した見事な詩です。この詩を紹介いたします。

**日照香爐生紫煙　　　日はを照らして を生ず**

**遙看瀑布挂前川　　　遥かに看るのをくるを**

**飛流直下三千尺　　　 　うらくはれ**

**疑是銀河落九天　　　銀河のより落つるかと**

廬山に隠棲していた李白に、玄宗の子であるから、幕僚になるように要請があり、魔が刺したのか、李白はこれに応じました。はから河南地方を治めるように命令を受け、これに成功しました。このとき、李白は「」という十一首の詩を作り、永王を讃えました。これらのうち｢其の一｣を紹介いたします。

**永王正月東出師　　　 正月 東にをだす**

**天子遙分龍虎旗　　　天子 遥かに分かつ龍虎の旗**

**樓船一舉風波靜　　　 すれば 静かに**

**江漢翻爲燕鶩池　　　はっての池とる**

また、李白は、上皇となったが長安に戻ったのを祝い**「」**という十首の詩を作りました。いずれも玄宗を讃えたもので、玄宗がの手により軟禁されていることを知りませんでした。このうち其の四を紹介いたします。

**誰道君王行路難　　　かう しと**

**六龍西幸万人歓　　　西にして ぶ**

**地転錦江成渭水　　　地はを転じて と成し**

**天廻玉塁作長安　　　天はをらして 長安とす**

　ところが、は新しく皇帝となったの命に従わなかったため、反乱軍とされ、等の軍により討伐されて死刑となりました．李白も死刑を宣告されましたが、周囲のとりなしにより罪一等を減ぜられて、蜀のの地に流罪となりました。

　流刑地の野郎に向かって長江を遡る途中に、の近くに寄り、**「史郎中欽と黄鶴楼上吹笛を聴く」**という詩を作りました。長安に帰りたいという気持は、寂しい「」を奏でる笛の音を聴いて、増していったようです。

**一為遷客去長沙　　　一たびとって に去る**

**西望長安不見家　　　西のかた 長安を望めども家を見ず**

**黃鶴樓中吹玉笛　　　 を吹く**

**江城五月落梅花**　　　 **五月**

ところが、李白に思いがけない幸運が訪れました。白帝城まで来たとき、大赦があり、流罪以下の者の罪が許されました。喜んで白帝城より長江を下る時に作られたのが**「早に白帝城を発す」**です。軽快な小舟に乗ってあっという間に三峡の地を抜け、開かれた平野に出るときの李白の喜びが、軽快なリズムの中に並の物では無かったことを伺わせます。

**朝辭白帝彩雲閒　　　にす の間**

**千里江陵一日還　　　千里の にしてる**

**兩岸猿聲啼不住　　　両岸の いてまざるに**

**輕舟已過萬重山　　　 已に過ぐ の山**

長江を下る途中、李白はを訪れ、**「洞庭に遊ぶ」**と言う詩を作りました。美しい景色を詠うと共に、伝説上の皇帝であるの娘でのとなり、舜の死に殉じて洞庭湖に身を投げて女神となったを詠うことにより、愁いを感じたことを表しています。

**洞庭西望楚江分　　　 西に望めば 分る**

**水盡南天不見雲　　　水尽きて 雲を見ず**

**日落長沙秋色遠　　　日は落ちて 遠し**

**不知何處弔湘君　　　知らず れのにかをわん**

又、李白は、別の人と洞庭湖を訪れており、この時も**「洞庭に遊ぶ」**という別の詩を作りました。洞庭湖の秋景色を詠ったものです。この詩の中に現れる「」は、景勝の地であり、数多くの「」と題する八首からなる詩が作られました。この伝統は二本にも引きつがれ「」「」などの詩が、これに倣って作られております。この詩を紹介いたします。

**洞庭湖西秋月輝　　　の西 輝き**

**瀟湘江北早鴻飛　　　の北 早く飛ぶ**

**醉客滿船歌白苧　　　船に満ち を歌う**

**不知霜露入秋衣　　　知らず のにるを**

この詩は、和歌にも影響を与えました。の詠んだ和歌を紹介いたします。

**おのづから秋のあはれを身につけてかへる小坂の夕暮れの歌**

このようにして、各地を放浪した李白は、５９歳の時に病にかかり、の県令の下に身を寄せましたが、この地で死亡しました。伝説では、川に映った月を取ろうとして水に落ちて溺死したと言われています。月が好きであった李白らしい伝説です。李白の子孫は庶民となり、その後の経歴は伝わっていません。

　李白の墓はのの麓に作られましたが、そののちに移されました．子孫とも離ればなれであったこともあり、その墓は荒れておりましたが著名な詩人が訪れております。

　は、に左遷されたときにその墓を訪れ、その荒れた様を詠い、李白を｢、即ち落ちぶれた者と詠っています。勿論、李白の価値が下がったと言うことでは無く、李白の墓にしてはみすぼらしいことを歎いたものです。「」の語源となったこの詩｢李白の墓｣を最後に『物語で楽しむ漢詩・和歌』「李白の生涯」を終わります。

**採石江邊李白墳　　　 李白の**

**繞田無限草連雲　　　田をりて無限 草 雲に連なる**

**可憐荒壟窮泉骨　　　憐れむべし の骨**

**曾有驚天動地文　　　曾て天を驚かし地を動かす文あり**

**但是詩人多薄命　　　だれ詩人 多く薄命**

**就中淪落不過君　　　　すること君に過ぎず**

**（渚蘋溪草猶堪薦　　　（ にゆ**

**大雅遺風不可聞）**　　　**の 聞くからず）**

　（）の尾聯は、「捜韻」にだけあり、『全唐詩』やその他の文献に見当たらない。

　（令和元年９月２２日作成）

参考文献等

　『李白１００選』石川忠久著、ＮＨＫライブラリー出版

　『中国漢詩吟詠全集　絶句編』後藤石韜緒、有限会社吟濤社出版

　『和漢名詩選評釈』簡野道明著、明治書院出版

　ブログ「千人万首　資料編　和歌に影響を与えた漢詩文」

　<http://www.asahi-net.or.jp/~sg2h-ymst/yamatouta/sennin/kansi.html#kansi>